

水仙

池松 孝子

今月の私の部屋のカレンダーは越前海岸一面に咲く水仙だ。プロのカメラマンのアングルによる、この時期にしか撮れない深い空の青と水仙の黄色と葉の緑だ。

水仙と聞いて最初に思い浮かぶのはこの越前海岸であろう。奇岩の広がる断崖絶壁、その下の波荒い海岸線と対照的なのが斜面一面の可憐な水仙だ。この海岸線の水仙畑は国の「重要文化的景観」に選ばれている。

かつて、ここを訪ねた時、土地の年配のおじさんが水仙の美しさをいろいろ話してくれた。「厳しい冬の寒さとそれに耐えて咲くこの見事な水仙は、日本海側に住み、忍耐力のある我ら福井の県民性とよく合っている」と。越前海岸を訪ね、この話を聞いたのは一度ではなかった。

正月花として欠かせない人気の水仙は平安、鎌倉時代にはすでに文献に登場する。水仙の球根はそれ以前に、人の手を介してではなく海を流れて渡ってきたという説が有力である。島崎藤村作詞のあの「椰子の美」が思い出され、何ともロマンを感じる。学名はナルキッソス。ギリシャ神話の美少年の名に因み、自己愛、うぬぼれ、自己陶醉者（ナルシスト）などの花言葉を持つ。

日本水仙の三大群生地というと、福井県越前海岸、千葉県鋸南町、兵庫県淡路島である。水仙の自生地はいずれも海岸沿いに集中している。地中海からシルクロードを通じて中国に伝わり、中国から海流に乗って日本の海岸にわたって野生化したという説の根拠にもなっている。古くから水仙の群生地として知られるところは、伊豆半島、紀伊半島など海岸近くである。たどり着いた海岸線で日当たり、風通しなど原産地、地中海の気候に近いところで生き延びたと言われている。鋸南町の水仙は江戸時代には、すでに船で江戸に出荷され、高貴な花として好評だったという。

水仙のこち向く花の香をもらう
中村 汀女

水仙はヒガンバナ科なので有毒だ。萼と間違つて食べたり、病院、給食で出されたことによる食中毒がニュースでも報道される。